



L・NETワークース通信

## 猪ブーと大学のなかでのぼく

西村美東士 (徳島大学大学開放実践センター助教  
前昭和音楽大学短期大学部助教)

猪ブーが始まって6年が経った。ぼくは、毎年度、猪ブー記録集「いなほ」で、次のように「ぼくにとっての猪ブー」を書き続けてきた。

### ●一九九二年度

「猪ブーは出入り自由の、こころのネットワーク。だーぼくと猪ブーの関係」

1 ブーローの自由な精神を求め、2 アイデアはバラバラだけれど、そのひとつひとつが主物、3 ブーローの自由における「深い撤退」、5 出入り自由の淋しさを愛容する、6 江戸市にとつての「流入青年」たち(を歓迎する)、7 キャンプは夜だ、8 青年が自分のお金を払う時、9 空白のプログラム、10 猪ブーは應しのネットワークである。

### ●一九九三年度

「猪ブーはどうしてネオ・トラなのか」

1 ネオ(新しい)でトラ(伝統的)

な猪ブー、2 アイデアばらばら(を)った年の年固計画、3 いかにもトラ(伝統)的な猪ブー、4 猪ブーのネオ(新しい)は、どこにあるの、5 これからネットワーク社会を担う人間の育ち方、6 猪ブーはノリのよい猪だだけではないものか?。

### ●一九九四年度

「初めての人のための、猪ブーとは何か」

1 ヒエラルキーを顕微鏡はすブーローの「自由な遊び心」、2 自分の人生をいかに大切に生きていくという「ミライズム」の肯定、3 善と悪、業と毒の混在するアンビバレンツな人間存在のサレの心、4 共生社会創造のため公的サービス、5 いい男、いい女と成長、受容と愛容の循環。

### ●一九九五年度

「おうち」としての猪ブー猪ブーの公的・現代的意義」

「こりかたまって担任されたぼくの思考が、「猪ブーはおうちだ」という言葉によってするすると解き放たれていった。ああ、そうだ、そういえば「おうち」というのは、どんなに大人になつたっていつまでも必要だ...」「おうち」も「外の世界への参加」も、どちらもすてきなものになればよいのだ。

### ●一九九六年度

「いい世界だよ」

猪ブーといういい世界とたまたま出会ったと思えばいい。こういう世界のおよさを知らない人に対しては、その人は知らないというだけの理由なのだから、抗弁したり非難したりすることもない。でも、「こんないい世界があるんだよ」という「提案型」のメッセージだけは、猪ブーからこの競争社会に送ってみたい。

また、この上下競争社会のなかで水平買賣交流の居心地のよい共生のサンマの内実をつくりだしている主体は、猪ブーというシステムでもなければ、担当職員やぼくでもない。たまたま「今、ここ」集まっている人たちが割り出しているのだ。  
もちろん、だからこそ、こわれるかもしれない危うい存在である。だが、今のところはそれぞれの人々が、このいい世界の作り手の一人である。

上の最後にあるように、猪ブーの作り手は「たまたま、今、ここ」集まっ

ている人たち」である。でも、ぼくはつてそこにいた。このぼくはどんな価値をもつていたのか。年間計画としてのぼくの役割については、すでに「ミ・ヒエラルキー形成の阻止」として、そのため

①ニューカマー新規参加者をさつそく主役にする。

②もうすでに歩いている人よりも、これか足をとおすやと踏み出そうとしてくる人の「初めの一歩」を支援し、詳細し、気を養にさせる。

③撤退を望む人には、さわやかに深く撤退できるように仕向ける。

の3つを留意点として挙げている(一九九三年度)。

そこで、「ここ」では、ぼく個人の態度等が猪ブーや大学の雰囲気づくりに与えた影響をまとめておきたい。

先日、大学の授業の締めくくりにあたり、2年間おつきあいたたいた短大2年生に「mitoの授業の印象」に関する自分個人にとつてのキーワードを一人ひとり出してもらった。これをまとめたものが左図である。

図を見て気づくように、そのほとんどが、態度や雰囲気に関することである。単位認定に結びつかない猪ブーにおいては、なおのこと、それがぼくの存在の意味だったといえるのではないかと。子どもっぽくて寂しがり屋のぼくではあるが、それだからこそ現代社会の、そして人間存在の、孤独な宿命のなかで、8年間の大学の授業や6年間

